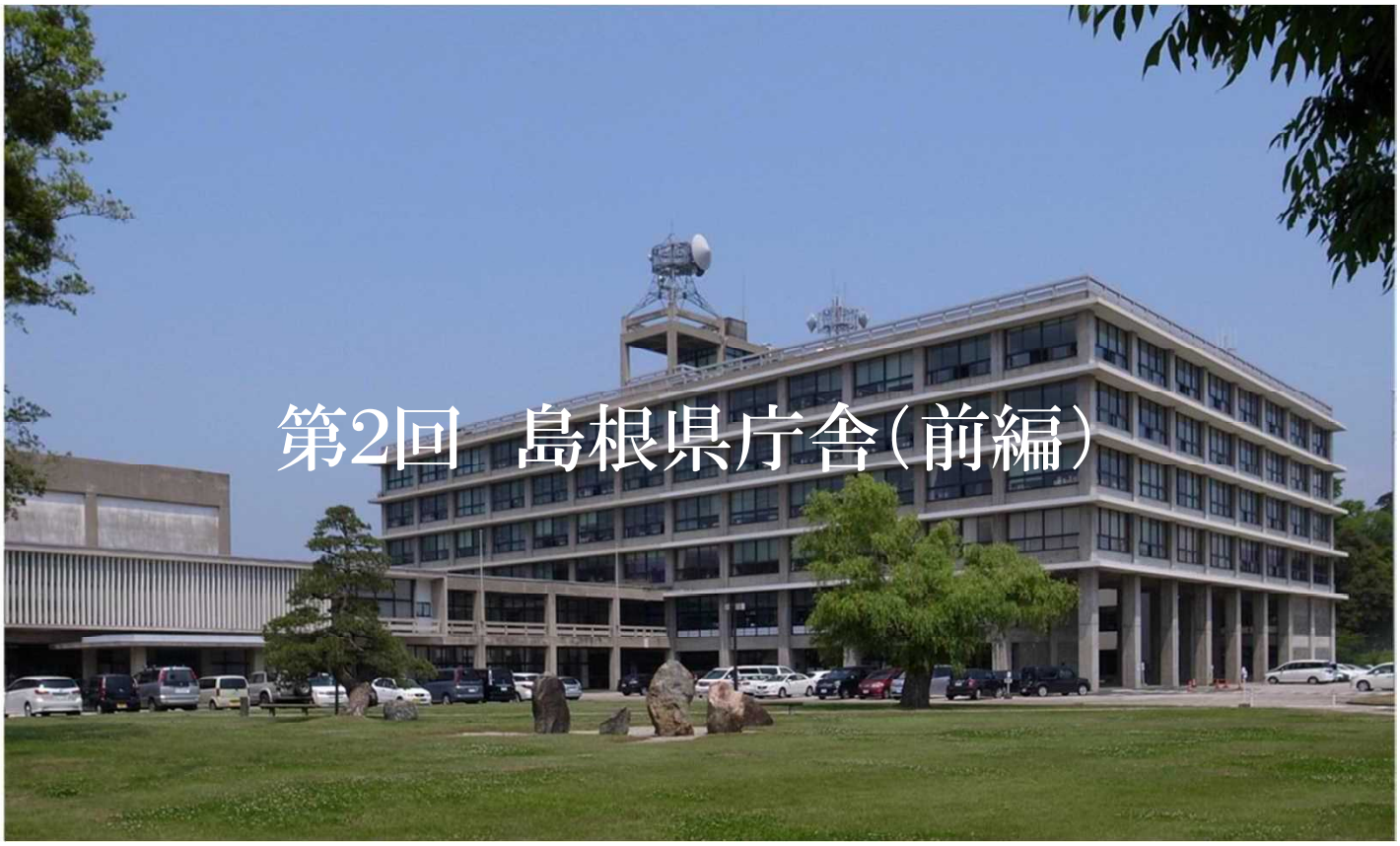
大建築の聖地

2012.07 / Vol.2



第2回　島根県庁舎（前編）

（勝手に）国宝！島根県庁舎

今回から、インターネットサイト「大建築」にて松江城よりも先に「国宝認定（※１）」された「島根県庁舎」についてお話しします。

現在の島根県庁舎は初代から数えると5代目にあたります。先代（４代目）の庁舎は昭和31年12月の失火により全焼したため、県は昭和３２年1月末に新庁舎の設計を建設省に委託し、同年7月末に設計完了、昭和３４年２月に新庁舎が完成しています。

注目すべきは、火災で設計の基礎となる行政資料等がすっかり焼失し、全くのゼロからのスタートにもかかわらず、これだけの規模の建物をたったの6ヶ月で設計しているということです。これは情報通信手段が進歩した現在から見てもすごいスピードです。（※２）

並々ならぬ手腕を発揮した建設省の設計担当者は、営繕局の建設専門官であった安田臣（やすだ・かたし）でした。

伝説の営繕官僚　安田臣

安田臣は明治４４年に邑智郡石見町日貫（現邑南町）に生まれ、昭和12年に早稲田大学建築学科を卒業後、同潤会技師などを経て建設省九州地方建設局営繕部長、営繕局監督課長を歴任しました。昭和３８年に建設省を退職後も、自身の設計事務所を開設し設計活動を続けました。

代表作には島根県庁舎(S34)、島根県民会館(S43)のほか、建築学会賞を受賞した大分県庁舎(S37)（※３）があります。

若い頃から豪傑として知られ、国主催の国立国会図書館設計コンペ（S29）では著作権を軽視した応募規定に反発し、建設省の管理職であ

※１　あくまでもサイト作成者・山岡さん独自の評価ですので、本気にしてご家族やご友人に「県庁舎って国宝なんだぜ！」と言わないようお気をつけください。あとで恥ずかしい思いをします。

※２　これだけの超短期間で設計を完了させることができた背景には、設計の基礎的資料をゼロからまとめ上げた当時の土木部管理課長・森広厚造氏（当時）を始めとする県側担当者の奮闘がありました。その迅速かつ正確な仕事ぶりは、旺盛な行動力で知られた安田氏も舌を巻くほどでした。

※３ 大分県庁舎

photo by Oitakiseichu, CC-BY-SA from Wikimedia Commons

るにもかかわらず民間の建築家達と連名で抗議声明を出すなど、数々の逸話を残す伝説の営繕官僚でした。

ピロティは“民主主義”の象徴

県庁舎の魅力を語るにあたり、まずは最大の見せ場である東側のピロティ（※４）についてご説明したいと思います。

そもそもピロティとは単なる雨よけの空間ではなく、近代建築の歴史上、ある重要な意味を持たされています。20世紀を代表するフランスの建築家ル・コルビュジエ（※５）は「近代建築の５原則」（※６）を提唱し、その第1にピロティを掲げました。コルビュジエは、建築を大地から持ち上げることで生まれる空間を、市民の集会や自動車の交通のために提供することが新時代の建築に課せられた使命だと考えたのです。

この考え方は世界中の建築家に大きな影響を与えました。日本でも、当時建設された多くの公共建築にピロティが設けられているのは、それがいわば“民主主義”の象徴だと考えられていたからです。

“大黒柱”一歩間違えば“人柱”！？

ピロティの柱は、“民主主義”の空間を支える“大黒柱”ともいうべき象徴的な存在です。この“大黒柱”は、県庁舎の建設現場の中でも特に苦心して作られた部分でした。

ご存じのとおり県庁舎の外観はコンクリート打ち放し仕上げですが、打ち放し仕上げはコンクリートの地肌がそのまま仕上げになりますから、失敗すればごまかしがききません。（※７）しかもピロティの独立柱となれば4面すべてが人目に触れるため、非常にレベルの高い仕上がりが要求されます。

通常の工事では型枠の中に鉄筋を全部組み上げた後でコンクリートを流し込みますが、少々油断すると鉄筋が密集した部分などにコンクリートが十分行き渡らず、柱や壁の表面に“じゃんか”（※８）と呼ばれる鬆（す）が入ってしまうことがあります。

そこで県庁舎のピロティ柱では、鉄筋がコンクリートの流れを妨げることのないよう、鉄筋を途中まで組んだ状態で職人1名を型枠の中に潜り込ませ、コンクリートを流し込みながら残りの鉄筋を素早く組み上げていくという、オドロキの工法が採用されました。（※９）

深さ8.2ｍの井戸の底のような柱型内でコンクリートを流し込みながらの作業は、一歩間違えば“大黒柱”どころか“人柱”になりかねないものでしたが、命がけの作業の甲斐あって、あの力強く美しい“民主主義の大黒柱”は誕生したのでした。

※４「ピロティ」：建物の１階にある、柱のみの半屋外空間

※５　ル・コルビュジエ（1887-1965）スイス出身、パリに設計事務所を開設。20世紀の近代建築に最も影響を与えた建築家の１人。代表作は「サヴォア邸」、「ロンシャンの礼拝堂」、「チャンディガール都市計画」など。

※６「近代建築の５原則」：1927年にル・コルビュジエが提唱した近代建築が備えるべき５つの要素（①ピロティ、②自由な平面、③自由な立面、④水平連続窓、⑤屋上庭園）パリ郊外の住宅「サヴォア邸」（S6）は５原則をすべて備えた代表的作品（下写真）

photo by Valueyou, CC-BY-SA from Wikimedia Commons

※７　当時と比べてコンクリートの品質管理技術が進歩した現在でも、打ち放し仕上げの現場は独特の緊張感に包まれます。

※８　じゃんか

※９　言うまでもなく、今日では安全管理上あり得ない工法ですので、皆さんは決して真似をしないでください。当時は大らかな時代だったのです。

ALL“しまね”仕上げ

近年、島根県では県内産業支援施策の一つとして、公共工事に県内産資材を積極的に使用するよう努めています。

ところが、安田氏は今から50年以上も前に、県内産資材を単なる手近な材料としてではなく、「島根の郷土性の表現」や「県内産業の育成」といった現在でもそのまま通用する理念を掲げて県庁舎に積極的に使用しています。（下の写真は県庁舎に使用されている県内産資材の写真です。どこの部分の仕上げか分かりますか？）

しかも、単に県内産資材を使用するに留まらず、建材としては瓦が主産品だった石見焼で壁タイルを製作するなど、新しい使い方にも積極的に挑戦しています。これは安田氏が、建築家の視点から県内産資材の新しい魅力を引き出すことこそが、本当の意味での県内産業の支援であると考えていたためです。いまだに古びることのない安田氏の先進的な設計思想に驚かされます。

また、タイルや石だけでなく、打ち放し仕上げのコンクリート表面にも島根県産の杉型枠の木目が転写されていますから、県庁舎の外観のほとんど全ては島根の大地から生まれた材料で出来ていることになります。

いわば「ＡＬＬ“しまね”仕上げ」。

島根県を象徴する建築としてこれ以上のものはちょっと考えられません。

ただ、使用されている県内産資材の中には大芦石などすでに入手困難となったものもあり、仮に今、県庁舎と同じ建物を作ろうと思っても再現はほとんど不可能です。仕上げ一つを取ってみても、県庁舎がいかに貴重な建物であるかお分かりいただけると思います。

（次号に続きます。）

【 写真提供 】
秀浦 修 氏 （★印）

◇ 参考文献
島根県(1972)『島根県庁周辺整備誌』
田中孝(1988)『物語・建設省営繕史の群像』日刊建設通信新社

上段左から　杉板型枠打放しｺﾝｸﾘｰﾄ(柱・梁) / 布志名焼 （玄関壁） / 大芦石(東側ﾋﾟﾛﾃｨ外壁) / 石見焼ﾀｲﾙ(塔屋.吸気塔壁)

下段左から　布志名焼(玄関壁) / 荒島石(議会棟玄関壁) / 布志名焼(玄関壁) / 大根島石(外部通路床) ※ 布志名焼の背景は福光石